



AZAMI

あざみ

上級より

の教え

ゴルフマナー

修得講座

AZAMI(前)
スコットランドの国花。短い夏のラフに咲く可憐な花。花のなかのボールを打とうとしたゴルファーに、この先住者は朝の花で、平和な暮らしを奪う権利はないのだとセント・アンドリュースの聖人フランシスが諭して、アンブレヤール宣言させたという逸話が残っている。

鈴木 康之
挿画 ● 唐仁原 教久

私の目にはつきり二種類のゴルファーが見えてきました。ゲームの約束事を守ってプレーするゴルファーと、口ではエチケツトがだいじだと言いつながら手がそれをしないゴルファー、この二種類です。

久しぶりの我孫子GCで嬉しいものを見ました。乗用カーに大きな砂袋があるのはどことも同じですが、違いが二つ。スコップではなく取っ手のついたマグカップが数個。それと砂袋の開口部が円ではなく、陸上競技場のトラックの形、左右の半円形を直線につないだ角丸長方形。口が広くてマグカップの使い勝手がとてもいい。

プレーヤーは次打地点へマグカップに砂を入れて行き、自分のデイボット跡、余った砂で通りすがりの直し忘れられたデイボット跡を埋められるという案配です。数年前に当ヘージで三週にわたって紹介した世界の目土方法のなかに豪州の超ミニバケツがありましたが、その半分ほどの容積。「スコップ時代に比べて大半のメンバーさんに目土の習慣が行き渡ったようです」とキャデイさんも喜んでいま

した。手軽さとオシャレな工夫のためでしょう。よく研究された我孫子流です。

関西地区でマイ目土袋の携行がメンバー間の習慣として根づいたのは、私の知る限りでは洲本GCが平成十四年から、早いほうではないかと思えます。研修会などが率先してマイ目土袋携行を実践しているケースも東西各地から聞こえてはいました。

数年前、関西地区にマイ目土袋を流行らせたのは、千刈

CCかもしれない。同地区のクラブ対抗で「目土袋の貴島さん」と呼ばれるほど有名な競技委員の貴島哲香さんのカッコよさを見習おうと、個人名入りのマイ目土袋を有志が持ち、「千刈目土を入れる会」が発足しました。

関西のクラブは人的にも距離的にも近いせいでたちまち話が広がり、多くのクラブの有志たちが同じことを始めました。その動きが姉妹コースなど提携関係のある他地区のクラブの有志たちにも及び、マイ目土袋を携行するグループがあるゴルフ倶楽部は、私の耳に入っているだけでも全国で二十を越えます。



それも丁寧に平らにならされていきました。手に砂を持つ人が多くなればそうなるのです。コース管理課での定期的な目土作業日はないそうです。支配人の池戸秀

先日、千刈CCを見て、唸りました。キャデイさんが相当丁寧に目土するコースでも、グリーン手前五、六十ヤード地点から未修復のデイボット跡が目立つものです。キャデイさんがカート道路のほうへ行ってしまうためです。千刈CCのそのエリアのデイボット跡はほとんど砂で埋められ、

行さんは、いまはラフの目土を励行していると言っています。そう、ラフのデイボット跡は周囲から草が伸びて被さり、不陸といつて魔のボール隠しになり、進行が滞るスロプレーの原因にもなります。ラフのデイボット跡の放置はフェアウェイ上のそれよりタチが悪いのです。

みんなまで消せば なくなるもの



ゴルフにはスコアよりもっと大切なことがある。

鈴木康之著 最新刊
『脱俗のゴルフ』
(小社刊)
続・ゴルフマナーのスピリット

新書判・並製
定価900円(税別)

すずきやすゆき
ゴルフマナー研究家
著書に「ピーターたちのゴルフマナー」(小社刊)などがある。